

1. 開催概要

展覧会名	ピーター・ドイグ展	
開催施設名	会期	入場者数
東京国立近代美術館	2020 年 2 月 26 日～10 月 11 日 ※2 月 29 日～6 月 11 日は臨時休館	71,226 人 (内覧会等を含む)
●開催概要 本展は今日、世界で最も重要なアーティストのひとりと言われるピーター・ドイグ(1959-)の初期作から最新作までを紹介する日本初個展だった。本人およびギャラリーが積極的に展覧会に関わることで、MOMA、テートなどの世界的な主要美術館および個人所蔵家から主だった作品を借用することが出来た。 当初、2 月 26 日～6 月 14 日の会期であったが、新型コロナウイルス蔓延による緊急事態宣言などがあり、2 月 29 日～6 月 11 日まで臨時休館となった。幸い、作家、所蔵先から理解を得ると共に国家補償の延長に係る変更承認申請を行い、認められたため、会期を 10 月 11 日まで延期し、再開をした。しかし、その影響は強く、目標としていた入場者数には残念ながら到達できなかった。 また、この会期延長にともない、文化審議会美術品補償制度部会において、契約期間の延長および作品返却に関する安全配慮事項の変更を特例的な措置として認めていただいた。 なお展覧会に対する評価は、美術関係者および一般の来場者から非常に高かった。その理由としては、日本で初めてまとまった形で紹介される展覧会だった点、作品が魅力的であった点が挙げられる。その結果、展覧会図録の購入率が高く、展覧会場で撮影した写真が SNS で拡散されるなど、閉幕間際は大変な盛り上がりとなった。		

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

①観覧料の軽減・無料化

新型コロナウイルス蔓延により、2月26日開幕後すぐに臨時休館となった。そのため、当初予定をしていた高校生・大学生の無料期間「3月24日～4月5日」を「8月1日～30日」へと変更をした。

【予定軽減金額:109万／実績216万】

②作品の質・量の充実

作品の質・量の充実については、当初の予定通り、作家の重要な作品を、リバプール国立美術館から借用することが出来た。

ただし、新型コロナウイルス蔓延により、航空運賃の高騰、航空便減少による経由地の追加設定などがあり、作品を安全に返却するための追加費用が必要となった。

【予定軽減金額:700万／実績1180万】

③教育普及活動の充実

「子ども向けワークショップの開催」「作家による講演会」を予定していたが、前者は三密を避ける感染予防対策のため中止となった。また、後者は新型コロナウイルス蔓延による臨時休館のため中止となったが、急遽、作家によるトークショーを実施し、その様子を撮影した映像を、後日、インターネットで配信をし、それらの制作費に還元額を充当した。

【予定軽減金額:158万／実績87万】

④新型コロナウイルス感染症予防対策費

当初の申請時にはなかったが、展覧会を再開するにあたり、来場者に対して安全な展覧会環境を保証するため、感染症予防対策費を追加した。

【予定軽減金額:0円／実績450万】

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

新型コロナウイルス蔓延により、臨時休館(2/29～6/11)せざるを得ず、その間の公開が出来ず、予定通りの作品の返却が不可能となった。このため、所有者の理解を得ると共に、国家補償の延長に係る変更承認申請を行い、認められた。このことにより、当初の会期を延期出来ることとなった。作品コンディションについては、作品が油彩という長期間の展示に耐えられる素材であり、臨時休館中は照明を当てなかったため、閉幕時に状態の変化は認められなかった。

新型コロナウイルス蔓延により、閉幕時に、クーリエの来日および日本側コンサバーターの海外渡航が出来ず、更に日本側の修復家や学芸担当者が所有者の元でのコンディションチェックに立ち会えないこととなった。

そのため、日本における梱包においては、インターネットを使い、所蔵先とコミュニケーションを取りながら、作品のコンディションチェックを実施することとなった。また、現地に借用時に立ち会った修復家や学芸担当者が渡航困難な状況となったことから、主催者が依頼したスタッフが主催者側代理人として輸送立ち合い、作品のコンディションチェックを行った。更に、作品を載せたカーゴ機へのクーリエの同乗も出来なかったため、特例的な措置として、クレートにデータロガーやショックウォッチを付けることで作品の安全な状態を確認できるように努めた。

また飛行機の減便により、返却輸送便の確保が難しく、直行便ではなく経由便を利用することとなったが、国家補償締結期間内での返却可能なスケジュールを確保に努め、無事に作品返却を終了することが出来た。

4. 安全配慮に関する特別の対応

往路の輸送便には、各館のクーリエや日本側開催館学芸員、修復家が随行した。

復路については、新型コロナウイルス蔓延により、クーリエの来日、日本側スタッフの海外渡航が難しかった。そのため、日本における作品梱包は所蔵先の学芸員等とインターネット経由で作品コンディションチェックを実施し、情報の共有化を図った。

また輸送に関して、日本国内の移動は、主催者がトラックに同乗し、パレットへのクレート積み付けまで立ち会った。その後、飛行機での輸送に関しては、クレートにデータロガー、ショックウォッチを付けて、作品の安全に細心の注意を払った。

現地に到着後についても、主催者が依頼したスタッフが主催者側代理人として輸送立ち合い、作品のコンディションチェックを行った。返却先がアメリカ、ヨーロッパと多岐にわたったが、写真などで速やかに情報を共有することで、安全を最優先にした輸送プロセスを確保できた。

5. 紹介事例・今後の改善点等

本制度の適用によって、ピーター・ドイグという現代における重要な画家を、日本に紹介できたことは、「広く国民にすぐれた美術品鑑賞の機会を提供する」と本制度の趣旨に合致する。 特に、新型コロナウイルスが蔓延し、多くの美術館が臨時休館する中、展覧会を開催する意義は大変高かったと感じている。会場では、特に若年層の来場者が多く、これからの美術を担う彼らに対して貴重な機会を提供できたといえる。 一方、作品返却については、海外クーリエの来日、日本側スタッフの海外渡航が出来ないという状況になったものの、特例的な措置として、インターネットを通じた作品コンディションチェックの実施、データロガーやショックウォッチという機器を駆使し、輸送の安全を保つ努力を行った。 会期の延長、カーゴ便でのクーリエ無しの返却など不測の事態となったが、これまで培ってきた主催者側と所蔵先との高い信頼関係があつてこそ、作品を無事に所蔵先に返却が出来た。

6. 展覧会の収支決算書

主催者：東京国立近代美術館、読売新聞社、ぴあ			
(収入)		(支出)	単位＝万円
内訳	決算額 (当初予算額)	内訳	決算額 (当初予算額)
展覧会収入（入場料、図録、グッズ等）	13,939 (15,565)	企画準備等基本経費（借用料、保険料、輸送費、印刷費等）	12,780 (14,114)
協賛金・主催者負担等	6,472 (5,670)	設営・運営等会場関係経費（広告宣伝費、展示施工費、警備費等）	7,631 (7,121)
収入総額	20,411 (21,235)	支出総額	20,411 (21,235)